

山内先生 出会いと今

永島晴夫*

最初に、いつ、出会ったかは覚えていない。私が卒業した直後に赴任された先生である。とにもかくにも、今まで私が学生時代に接してきた先生方とは異なる雰囲気であった。就職して間もなく教室を訪れた時、学生諸君達とはしゃぎ、大久保先生や事務官の吾郷さんにたしなめられている先生の姿は、ついこの間まで学生であった私には、異なった次元の光景であった。

二十余年の私の浜田での仕事の合間には、教室を訪れることもあり応用地質分野や同窓会での集まりで再々お目にかかる事もあったが、具体的にフィールドを共にすることは無かった。石見地域の窯業資源（都野津層の粘土）の調査を行うことになったが、先生のご支援を戴かなければ事業推進が困難な状態であり、懇願してお出まし戴くこととなった。野外に出られると極めて旺盛な好奇心と思ひもよらぬアイデアの提案にひたすら驚くばかりであった。また、前例に拘ることなく、事実のみで構築される論理構成には日々の私の役人的発想に反省を与えた。

年齢を詐称し、時には四十肩などを、気にはされることもあった。しかし、夏の夕暮れ、疲れきって、へたり込んだ場所で、層序に疑義が生じたとき、それならば頭上の露頭で解決しようと、藪をかき分け証拠を提示された。イマドキノワカイモノはひたすらな情熱と馬力に驚愕した。また、もち前の明るさは、貴重な露頭が存在する家の裏の露頭確保に絶大な効果を与えた。家の裏の崖を説明をしている内に、郷土史の地理地質分野の校正に転じ、お茶だ、菓子だとはなって、とんだ時間つぶしもなったが、普及活動とも思えば、大変良い思い出となった。

私どもの所に来訪された時など、只の小父さんとのような振る舞いに、職員は実は只の小父さんでは無いと知ると大学の先生にもあんなタイプの方がおいでになることに驚く。地質学の存在が問われている今、調査研究内容を資源開発や防災などの分野に還元される基本的態度は社会からも歓迎されている。温泉開発や資源開発の調査依頼の相談の場では出会うと、開発後の社会的状況をも考慮した意見を開陳され、一般の人びとに貢献する地質学の存在意義を強く感じている。

都野津層の記載は昭和40年ごろからおこなわれ、その後にも記載は積み上げられてきた。しかし、記載が多くなるに従い、混乱は増加している。先生は、火山灰の層序学的意義を重視され、近年学生諸君と火山灰の検討をおこなわれている。ほんの1月の間に大阪層群の火山灰の採集や益田市の火山灰の採集を日帰りでされたと聞く。未だパワーは残っているようである。野外が先生には一番似合う。40歳位年上の先生が、学生諸君と露頭での議論をされるのを見ると、年の差はともかく、真実追求の欲求は全ての人に等しくあることを感ずる。その場での議論に寛容と忍耐をもって明るく当たられると、切れやすい私には、万年青年の山内先生の、無言の圧力となる。例え退官されても、共に老いながら露頭の前で議論は続くであろう。まだ、思い出つくりの真っ最中である。

*島根県産業技術センター勤務 昭和45年卒業